

# 海外渡航における日本人の 事件・事故・感染症に対するリスク認知および予防行動意図

ミヨシ トモミ ワタナベ マサキ  
三好 知美\*1 渡邊 正樹\*2

**目的** 新型コロナウイルス感染症の流行以前は、海外に渡航する日本人は増加傾向にあった。同時に海外渡航における日本人の事件、事故、傷病も増加し、2015年の海外邦人総援護人数は2万人を超え、海外渡航者の安全対策が喫緊の課題である。本研究の目的は、海外渡航において日本人が遭遇する主なハザードである犯罪、事故、感染症を取り上げ、リスク認知、自己効力感および主観的知識を把握し、予防行動意図との関連を明らかにすることである。

**方法** 調査機関の登録者のうち日本国籍を持つ20～69歳の計2,000名を対象にWeb調査を実施した(有効回答者1,989名)。調査時期は2016年12月であった。調査内容は、基本属性、過去10年間の渡航回数および被害経験、犯罪、事故、感染症に対するリスク認知(重大性、被害可能性)、自己効力感、主観的知識および予防行動意図である。予防行動意図は、安全情報収集意図、感染症情報収集意図と海外保険加入意図の3項目であった。

**結果** 渡航回数別の比較では、重大性は、すべてのハザードにおいて渡航回数間に有意差( $p < 0.05$ )が認められ、犯罪では渡航回数5回以上の者は、渡航回数1回の者より重大性の認知が低かった。被害可能性は、事故のみで渡航回数間に有意差が認められた。一方、自己効力感、主観的知識では、すべてのハザードにおいて有意差が認められ、渡航回数が多い者が有意に高い傾向がみられた。自分の被害経験有無では、重大性、被害可能性は、すべてのハザードで有意差が認められなかった。しかし、身近な人の被害経験の有無では、重大性は犯罪、事故で、被害可能性はすべてのハザードで、身近な人の被害経験がある者が、ない者に比べて有意に高かった。安全情報収集意図、感染症情報収集意図、海外保険加入意図それぞれを従属変数とした重回帰分析を行ったところ、重大性の標準偏回帰係数が高く、他の独立変数に比べて強く影響していた。

**結論** 海外渡航で遭遇する新たなハザードの種類や程度によっては、過去の経験と大きく異なる場合がある。過去の経験が判断を誤らせリスクを過小評価したり、自己効力感、主観的知識が高い場合には、予防行動やリスク回避行動を妨げたりすることが懸念される。経験による認知バイアスを考慮した対策が必要であることが示唆された。

**キーワード** 海外渡航, ハザード, リスク認知, 自己効力感, 主観的知識, 予防行動意図

## I 緒 言

新型コロナウイルス感染症の流行以前は、海外に渡航する日本人は増加傾向にあった<sup>1)</sup>。渡航目的や渡航先にも変化がみられ、従来の観光

や仕事から留学、修学旅行など多種多様となり、渡航先も先進国の観光地や赴任先のみならず発展途上国にまで拡大した<sup>2)</sup>。しかし、同時に海外渡航における日本人の事件、事故、傷病も増加し、2015年の海外邦人総援護人数は2万人を

\* 1 東京大学医学部附属病院循環器内科学術専門職員 \* 2 東京学芸大学名誉教授

を超えた<sup>3)</sup>。海外渡航には、個人が何らかの目的を果たすといったベネフィットの側面があるが、反面日本とは異なるリスクも伴っており、海外渡航者の安全対策が必要である。現在、海外渡航者の安全対策に関する取り組みとして、外務省の「海外安全ホームページ」<sup>4)</sup>および厚生労働省検疫所のホームページ「FORTH」<sup>5)</sup>にて、事件、事故、感染症の発生状況について常時危険情報が提供されている。しかしながら、これらの危険情報や衛生情報の受け手である海外渡航を計画する日本人が、どのように認識し予防行動を考えているかは明らかにされていない。先行研究において、国や専門家の判断によるリスクの客観的指標と一般の人々のリスクの認識にはギャップがあることが指摘されており<sup>6)7)</sup>、人々の意思決定はリスクの客観的評価からみると合理的とはいえず、主観的な認知に影響されることが指摘されている<sup>8)</sup>。その原因には、リスクという確率的で不確実性を含んだ概念は人々にとって認識が難しく、リスクについての情報処理過程に認知バイアスが生じるためといわれている<sup>7)</sup>。したがって、海外渡航者の安全対策ではリスクの客観的指標を示すだけでなく、海外渡航者のリスク認知を把握する必要がある。海外渡航のリスク認知と予防行動意図に関する日本の先行研究は、大学生を対象とした海外旅行のリスク認知と海外旅行保険加入意図<sup>9)</sup>のみであり、海外安全に関する情報収集意図を含めた予防行動意図については十分検討されていない。海外の調査では、ハザード別のリスク認知を比較した研究はあるものの、熱帯・亜熱帯地方のハザードに着目した研究<sup>10)</sup>にとどまっている。そこで本研究では、海外渡航において日本人が遭遇する主なハザード<sup>3)</sup>である犯罪、事故、感染症を取り上げ、リスク認知、自己効力感および主観的知識を把握し、予防行動意図との関連を明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ 方 法

### (1) 調査対象者と調査方法

2016年12月、楽天インサイトのモニター登録

者のうち、日本国籍を持つ20～69歳を対象としてWeb調査を実施した。目標回答数は、20代～60代の各年代別に男女それぞれ200名ずつ計2,000名と設定し、2,000名の回答を得られた時点で調査を終了した。調査対象とした年齢階層は、「海外旅行者の性別・年齢階層別構成比率」<sup>11)</sup>を参考に、海外渡航者が多く含まれる世代を対象とし、海外渡航者が少ない10代以下、70代以上を本研究対象から除外した。また、海外渡航経験を調査日から過去10年間という期間が同一条件となるよう短期間でデータが収集できる方法としてWeb調査を実施した。

### (2) 調査内容

#### 1) 基本属性と渡航回数

基本属性は、年齢、男女を尋ねた。渡航回数については、過去10年間（2006年12月～2016年11月）の海外渡航経験について尋ねた。回答は、「ない」「1回」「2-4回」「5回以上」「不明」の5つの回答肢から1つ選ばせた。

#### 2) 被害経験

自分の被害経験、身近な人（家族、友人、知人）の被害経験の有無については、「過去10年間（2006年12月～2016年11月）の間に、犯罪、事故、感染症の経験を尋ねた。回答は、犯罪は「窃盗」「詐欺」「強盗」、事故は「交通事故」「レジャー事故」とし、感染症は「被害経験なし」「その他被害」「覚えていない」から複数回答で尋ねた。なお、自分の被害経験、身近な人の被害経験の項目は、「海外邦人援護統計」の主な事件・事故の事例<sup>3)</sup>と「海外安全資料」<sup>4)</sup>を参考に作成した。

#### 3) 海外渡航に関するリスク認知、自己効力感、主観的知識

海外渡航に関するリスク認知（重大性、被害可能性）、自己効力感、主観的知識は、犯罪、事故、感染症の3つのハザード別に尋ねた。リスク認知は、重大性と被害可能性を尋ねた。たとえば、犯罪についての重大性は「私は渡航・滞在先で犯罪被害に遭うのが恐ろしい」、被害可能性は「私は渡航・滞在先で犯罪被害に遭う可能性がある」である。自己効力感と主観的知

識は、海外旅行に関する感染症予防行動意図に影響を与えることが先行研究<sup>12)</sup>で示されている。本研究においても、自己効力感と主観的知識を調査した。たとえば、犯罪についての自己効力感は、「事前準備・対策をしておけば、渡航・滞在先で犯罪被害から私は身を守ることができる」であり、主観的知識は「私は海外の犯罪について正確な知識がある」を尋ねた。回答はいずれも「そう思う（5点）」～「そう思わない（1点）」までの5段階評価とした。

#### 4) 予防行動意図

予防行動意図は、外務省の「海外安全情報」<sup>4)</sup>と厚生労働省検疫所の「感染症情報」<sup>5)</sup>を参考に、安全情報収集意図、感染症情報収集意図と海外保険加入意図の3項目とした。安全情報収集意図は、「治安情報」「法令・規則」「風俗・習慣」の3項目を尋ねた。たとえば、治安情報は、「今後海外渡航する際には、渡航先の治安情報に関する情報を積極的に得ようと思う」を尋ねた。感染症情報収集意図は、「今後海外渡航する際には、感染症から身を守るために渡航先で流行している感染症に関する情報を積極的に得ようと思う」、海外保険加入意図は、「今後海外渡航する際には、海外旅行保険に積極的に加入しようと思う」を尋ねた。回答は、いずれも「そう思う（5点）」～「そう思わない（1点）」までの5段階評価とした。

### (3) 分析方法

渡航回数別のリスク認知（重大性、被害可能性）、自己効力感および主観的知識の平均値の比較は一元配置分散分析を行い、効果量  $\eta^2$  を求めた。多重比較は、等分散を仮定しないことから統計的に頑健とされるGames-Howell法を用い、Bonferroniの調整を行い有意水準を5%の1/4である0.0125とした。被害経験の有無によるリスク認知（重大性、被害可能性）、自己効力感、主観的知識の比較は、t検定を行い、効果量  $d$  を求めた。予防行動意図への影響要因の検討では、安全情報収集意図、感染症情報収集意図および海外保険加入意図をそれぞれ従属変数とした重回帰分析を行った。統計解析は、

表1 対象者の属性、渡航経験および被害経験

(単位 名)

	n	%
性別		
男性	989	49.7
女性	1 000	50.3
年齢層		
20～29歳	391	19.7
30～39	398	20.0
40～49	400	20.1
50～59	400	20.1
60～69	400	20.1
渡航回数 <sup>1)</sup>		
0回	1 043	52.4
1回	303	15.2
2～4回	350	17.6
5回以上	271	13.6
覚えていない	22	1.1
自分の被害経験の有無 <sup>1)2)</sup>		
なし	739	78.6
犯罪	95	10.3
事故	24	2.6
感染症	16	1.7
その他の被害	78	8.4
覚えていない	26	2.8
身近な人の被害経験の有無 <sup>1)3)</sup>		
なし	1 378	69.3
犯罪	210	10.6
事故	42	2.1
感染症	42	2.1
その他の被害	116	5.8
覚えていない	298	15.0

注 1) 過去10年間（2006年12月～2016年11月）

2) 渡航回数1回以上の者（924名）

3) 有効回答者（1,989名）

4) 自分の被害経験の有無および身近な人の被害経験の有無は複数回答である。

IBM SPSS Statistics24を用いた。

### (4) 倫理的配慮

本研究を実施した調査機関は、(財)日本情報処理開発協会の「プライバシーマーク」およびISO/IEC27001 (ISMS) の認証を取得しており、登録者の個人情報保護に十分配慮している組織である。本研究は、2016年9月30日に東京学芸大学研究倫理委員会の審査にて承認された（承認番号198）。

## Ⅲ 結 果

### (1) 対象者の属性

対象者の属性を表1に示した。回答者2,000名のうち、ストレートライン回答者を除いた有効回答者1,989名（有効回答率99.5%）を分析対象とした。リスク認知（重大性、被害可能性）、自己効力感、主観的知識の性別と年齢層

別と平均値は表2に示した。リスク認知に関して、重大性の平均値が最も低かったハザードは事故の3.93±1.01であり、被害可能性では感染症の3.31±0.99であった。性別では、重大性は、すべてのハザードで有意差(p<0.05)が認められ、女性が男性より重大性の認知が高かった。年齢層別では、被害可能性は、すべてのハザードで年代間に有意差が認められた。

(2) 渡航回数別のリスク認知、自己効力感、主観的知識

犯罪、事故、感染症の3つのハザード別に、渡航回数によるリスク認知、自己効力感、主観的知識の平均値を表3に示した。重大性は、すべてのハザードにおいて渡航回数間に有意差が認められ、犯罪では渡航回数5回以上の者は、渡航回数1回の者より重大性の認知が低かった。一方、被害可能性は、事故のみで渡航回数間に有意差が認められた。自己効力感、主観的知識では、すべてのハザードにおいて有意差が認められ、渡航回数が多い者が有意に高い傾向がみられた。

(3) 被害経験によるリスク認知、自己効力感、主観的知識

犯罪、事故、感染症の3つのハザード別に、自分の被害経験の有無、身近な人の被害経験の

表2 リスク認知(重大性、被害可能性)、自己効力感、主観的知識の性別と年齢層別の比較

	全体 (n=1,989)		性別 (t検定)				t 値	p	d				
			男性 (n=989)		女性 (n=1,000)								
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差							
犯罪													
重大性	4.14±0.95		3.98±0.99		4.29±0.89		-7.19	<0.01	0.32				
被害可能性	3.52±0.94		3.53±0.94		3.52±0.94		0.21	0.84	0.01				
自己効力感	2.84±1.09		2.80±1.09		2.89±1.09		-1.91	0.06	0.09				
主観的知識	2.27±1.05		2.36±1.06		2.17±1.03		3.92	<0.01	0.18				
事故													
重大性	3.93±1.01		3.77±1.01		4.08±0.99		-6.73	<0.01	0.30				
被害可能性	3.37±0.96		3.40±0.93		3.34±1.00		1.30	0.19	0.06				
自己効力感	2.86±1.03		2.89±1.03		2.83±1.04		1.12	0.26	0.05				
主観的知識	2.22±1.03		2.36±1.03		2.09±1.02		5.87	<0.01	0.26				
感染症													
重大性	4.05±0.99		3.93±1.02		4.17±0.95		-5.32	<0.01	0.02				
被害可能性	3.31±0.99		3.34±0.99		3.28±0.98		1.22	0.22	0.05				
自己効力感	3.02±1.09		3.00±1.09		3.03±1.10		-0.63	0.53	0.03				
主観的知識	2.17±1.04		2.28±1.04		2.06±1.02		4.79	<0.01	0.02				
	年齢層別 (一元配置分散分析)												
	20代 (n=391)		30代 (n=398)		40代 (n=400)		50代 (n=400)		60代 (n=400)		F 値	p	η <sup>2</sup>
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
犯罪													
重大性	4.13±1.07		4.26±0.89		4.10±0.97		4.15±0.89		4.05±0.92		2.68	0.03	0.01
被害可能性	3.63±1.03		3.64±0.91		3.51±0.94		3.42±0.93		3.42±0.88		5.02	<0.01	0.01
自己効力感	2.84±1.13		2.78±1.14		2.92±1.06		2.86±1.03		2.83±1.07		0.88	0.48	0.00
主観的知識	2.32±1.13		2.27±1.05		2.30±1.04		2.22±0.99		2.22±1.03		0.83	0.51	0.00
事故													
重大性	3.93±1.09		4.04±0.96		3.93±1.01		3.87±1.02		3.87±0.97		1.89	0.11	0.00
被害可能性	3.47±1.01		3.47±0.98		3.35±0.95		3.23±0.97		3.33±0.88		4.65	<0.01	0.01
自己効力感	2.91±1.09		2.87±1.06		2.86±1.00		2.81±1.04		2.86±0.97		0.52	0.72	0.00
主観的知識	2.27±1.14		2.24±1.04		2.25±1.03		2.19±1.00		2.16±0.94		0.85	0.49	0.00
感染症													
重大性	4.09±1.06		4.14±0.97		4.02±1.01		4.01±0.95		4.00±0.96		1.57	0.18	0.00
被害可能性	3.47±1.02		3.42±0.99		3.22±0.98		3.20±0.95		3.24±0.97		6.53	<0.01	0.01
自己効力感	2.97±1.14		2.96±1.09		3.03±1.06		3.05±1.08		3.07±1.09		0.78	0.54	0.00
主観的知識	2.20±1.15		2.21±1.07		2.22±1.02		2.16±0.99		2.05±0.96		1.72	0.14	0.00

有無によるリスク認知(重大性、被害可能性)、自己効力感、主観的知識の平均値を表4に示した。自分の被害経験の有無では、リスク認知(重大性、被害可能性)は、すべてのハザードで有意差が認められなかった。身近な人の被害経験の有無では、重大性は犯罪、事故で、被害可能性はすべてのハザードで身近な人の被害経験がある者が、ない者に比べて有意に高かった。自己効力感、主観的知識は、すべてのハザードで、身近な人の被害経験がある者が有意に高かった。

(4) リスク認知、自己効力感、主観的知識が予防行動意図に与える影響

リスク認知(重大性、被害可能性)、自己効

表3 渡航回数別のリスク認知（重大性、被害可能性）、自己効力感、主観的知識の比較

	0回 (n=1,043)		1回 (n=303)		2-4回 (n=350)		5回以上 (n=271)		F値	p	η <sup>2</sup>	多重比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差				
犯罪												
重大性	4.17±0.96		4.21±0.87		4.15±0.91		3.97±0.95		3.67	0.01	0.01	1回>5回以上
被害可能性	3.49±0.96		3.59±0.90		3.57±0.94		3.57±0.90		1.48	0.22	0.00	
自己効力感	2.66±1.09		2.97±1.07		3.01±1.06		3.22±1.00		25.86	<0.01	0.04	1回>0回, 2-4回>0回, 5回以上>0回
主観的知識	2.05±1.02		2.29±1.00		2.49±1.02		2.78±1.01		43.97	<0.01	0.06	1回>0回, 2-4回>0回, 2-4回>1回, 5回以上>0回, 5回以上>1回, 5回以上>2-4回
事故												
重大性	3.95±1.03		4.01±0.92		3.93±0.99		3.79±1.00		2.73	0.04	0.00	
被害可能性	3.32±0.96		3.42±0.93		3.48±0.97		3.39±0.96		2.63	0.05	0.00	
自己効力感	2.70±1.03		2.98±1.03		3.04±1.00		3.10±0.98		19.44	<0.01	0.03	1回>0回, 2-4回>0回, 5回以上>0回
主観的知識	2.04±1.00		2.31±1.05		2.39±1.06		2.60±0.93		27.83	<0.01	0.04	1回>0回, 2-4回>0回, 5回以上>0回, 5回以上>1回
感染症												
重大性	4.11±0.97		4.07±0.96		4.05±0.99		3.86±1.05		4.43	<0.01	0.01	2-4回>0回, 5回以上>0回
被害可能性	3.30±0.98		3.35±0.97		3.34±1.01		3.28±0.99		0.40	0.75	0.00	
自己効力感	2.87±1.10		3.08±1.11		3.23±1.05		3.27±1.01		16.51	<0.01	0.03	2-4回>0回, 5回以上>0回
主観的知識	1.99±0.99		2.24±1.03		2.36±1.08		2.54±1.04		27.46	<0.01	0.04	1回>0回, 2-4回>0回, 5回以上>0回, 5回以上>1回

注 1) 一元配置分散分析  
2) 多重比較はGames-Howell法を用い、Bonferroniの調整を行い、有意水準をp=0.0125とした。

表4 被害経験によるリスク認知（重大性、被害可能性）、自己効力感、主観的知識の比較

	自分の被害経験あり		自分の被害経験なし		t値	p	d	身近な人の被害経験あり		身近な人の被害経験なし		t値	p	d
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差				平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
	(n=95)	(n=829)	(n=210)	(n=1,779)										
犯罪														
重大性	4.03±0.88		4.13±0.92		1.00	0.32	0.11	4.27±0.84	>	4.12±0.96	-2.10	0.04	0.15	
被害可能性	3.74±0.94		3.56±0.91		-1.82	0.07	0.02	3.83±0.80	>	3.49±0.95	-5.76	<0.01	0.37	
自己効力感	3.29±1.11	>	3.03±1.04		-2.34	0.02	0.25	3.16±1.07	>	2.81±1.08	-4.44	<0.01	0.32	
主観的知識	2.89±1.13	>	2.46±1.01		-3.90	<0.01	0.42	2.61±1.16	>	2.22±1.03	-4.67	<0.01	0.37	
事故														
重大性	4.04±0.86		3.91±0.97		-0.65	0.52	0.13	4.26±0.91	>	3.92±1.01	-2.18	0.03	0.34	
被害可能性	3.83±1.01		3.42±0.95		-2.08	0.04	0.43	3.86±0.95	>	3.36±0.96	-3.32	<0.01	0.52	
自己効力感	3.13±1.15		3.04±1.00		-0.41	0.68	0.09	3.26±1.17	>	2.85±1.03	-2.55	0.01	0.42	
主観的知識	3.08±0.97	>	2.41±1.02		-3.20	<0.01	0.66	2.98±1.20	>	2.21±1.02	-4.82	<0.01	0.75	
感染症														
重大性	4.13±1.09		4.00±1.00		-0.49	0.62	0.12	4.19±1.02	>	4.05±0.99	-0.93	0.35	0.15	
被害可能性	3.63±1.15		3.32±0.99		-1.22	0.22	0.31	3.74±0.83	>	3.30±0.99	-2.85	<0.01	0.44	
自己効力感	3.31±1.14		3.19±1.06		-0.46	0.65	0.12	3.19±1.09	>	3.01±1.09	-1.05	0.30	0.16	
主観的知識	2.81±1.22		2.37±1.05		-1.68	0.09	0.42	2.74±1.17	>	2.16±1.03	-3.60	<0.01	0.56	

注 t検定

力感、主観的知識が予防行動意図に与える影響について検討をした。予備分析で、安全情報収集意図3項目（治安情報、法令・規則、風俗・習慣）の間に高い正の相関が認められたため、安全情報収集意図3項目について主因子法による因子分析を行った。その結果、因子負荷量は、0.882~0.932であり1つの因子にまとめることができた。以下、3項目の合計得点を「安全情報収集意図」の変数とした。次に、渡航経験がある者を対象に、安全情報収集意図、感染症情報収集意図、海外保険加入意図を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、調整済み決

定係数は、すべてのハザードにおいて有意であった（表5）。安全情報収集意図、感染症情報収集意図、海外保険加入意図において、重大性の標準偏回帰係数の値が高く、他の独立変数に比べて強く影響していた。

#### IV 考 察

海外旅行経験によるリスク認知の比較を行った先行研究<sup>9)</sup>では、海外旅行経験がない者、1回の者はリスク認知が高く、海外旅行2回以上ある者はリスク認知が低かったことが報告され

ている。Zimmermannらの研究<sup>10)</sup>においても、熱帯・亜熱帯地方への旅行経験がある者は、旅行未経験の者よりリスク認知が低かったことを示している。本研究においても、犯罪において渡航回数5回以上の者は、渡航回数1回の者に比べて、重大性の認知が低い結果であった。経験豊富な事柄に関して、経験的判断からリスクを過小評価してしまう認知バイアスの一つであるベテランバイアスの存在が挙げられる<sup>7)</sup>。海外渡航においても、渡航回数が多い者は、ハザードに対するリスク認知にベテランバイアスが生じ、リスク認知を低下させた可能性が考えられる。一方で、自己効力感と主観的知識は、渡航回数が多い者ほど高い傾向がみられた。これは、渡航回数が増えるとともに事前準備・対策の効果を実感した体験やハザードに関する主観的知識が増えたためと考えられる。しかし、海外渡航で遭遇する新たなハザードの種類や程度によっては、過去の経験と大きく異なる場合がある。そのため、過去の経験が判断を誤らせ、リスクを過小評価し、自己効力感、主観的知識が高い場合には、予防行動やリスク回避行動を妨げることが懸念される。

被害経験に関する先行研究では、過去に犯罪被害に遭った経験がある者ほどリスク認知が高いことが報告されている<sup>13)</sup>。被害経験は、一般的にリスク認知を高めるといわれている一方で、災害経験者は被害可能性を低く見積もっていたという報告があり<sup>14)</sup>、被害経験の有無はリスク認知において一貫した傾向を示していないことが指摘されている<sup>15)</sup>。本研究では、海外渡航における犯罪、事故、感染症の自分の被害経験はリスク認知に影響を与えていなかった。及川ら<sup>16)</sup>は、過去の被災経験で被害が小さかった場合は、その経験に基づき、その後発生し得る事象を軽視する傾向があり、被害に対するリスク認知が低下したことを報告している。また、個人でコントロールできる、死につながりにくい災害は、リスクを過小視されやすく<sup>17)</sup>、リスク認知の未知性因子の規定要因であるリスク事象に対する接触と知識は、未知性を低下させ、リスク認知を低下させる<sup>18)</sup>といわれている。本研究におい

表5 予防行動意図を従属変数とする重回帰分析

	$\beta$	p	95%信頼区間
<b>安全情報収集意図</b>			
<b>犯罪</b>			
重大性	0.23	<0.01	0.48, 0.78
被害可能性	0.08	<0.01	0.07, 0.36
自己効力感	0.09	<0.01	0.10, 0.34
主観的知識	0.01	0.65	-0.10, 0.17
<b>事故</b>			
重大性	0.14	<0.01	0.23, 0.51
被害可能性	0.05	0.05	0.00, 0.28
自己効力感	0.04	0.12	-0.03, 0.23
主観的知識	-0.03	0.22	-0.23, 0.05
R <sup>2</sup>	0.17	<0.01	
調整済みR <sup>2</sup>	0.17		
<b>感染症情報収集意図</b>			
<b>感染症</b>			
重大性	0.38	<0.01	0.32, 0.40
被害可能性	0.06	0.01	0.01, 0.09
自己効力感	0.11	<0.01	0.06, 0.13
主観的知識	0.00	0.90	-0.04, 0.04
R <sup>2</sup>	0.18	<0.01	
調整済みR <sup>2</sup>	0.17		
<b>海外保険加入意図</b>			
<b>犯罪</b>			
重大性	0.21	<0.01	0.16, 0.28
被害可能性	0.04	0.16	-0.02, 0.10
自己効力感	0.06	0.02	0.01, 0.10
主観的知識	-0.03	0.40	-0.08, 0.03
<b>事故</b>			
重大性	0.01	0.70	-0.05, 0.07
被害可能性	0.06	0.02	0.01, 0.12
自己効力感	-0.04	0.13	-0.09, 0.01
主観的知識	0.00	0.94	-0.05, 0.06
<b>感染症</b>			
重大性	0.18	<0.01	0.12, 0.23
被害可能性	-0.03	0.31	-0.08, 0.03
自己効力感	0.11	<0.01	0.06, 0.14
主観的知識	0.03	0.27	-0.02, 0.09
R <sup>2</sup>	0.18	<0.01	
調整済みR <sup>2</sup>	0.17		

ても、海外渡航を回避することで被害を避けることが可能であることや、自分の被害経験がある者は、生命にかかわる深刻な被害ではなかった、被害を受けても深刻な被害でなく済んだといった体験が、被害に対する未知性を低下させ、リスク認知を高めなかった可能性がある。一方、身近な人の被害経験の有無によるリスク認知の比較では、身近な人の被害経験がある者は、ない者に比べてリスク認知が高かった。感情と認知的反応を生成する直接体験と間接体験の影響を調べた実験研究によると、ある事象を間接的に経験したことがある場合には認知的な反応を生じやすい<sup>19)</sup>。また、犯罪の直接被害経験がない場合には、犯罪被害を具体的にイメージすることが困難になるため、犯罪不安である感情的反応よりもリスク認知を介して防犯意識に与える影響力が大きくなる<sup>20)</sup>ことが示唆されている。

このため、身近な人の被害経験を聞くことによって、被害に対して恐ろしさが喚起され、被害の重大性と被害可能性の認知が高まったことが考えられる。海外渡航に関する身近な人の被害経験を伝えることは、リスク認知を高める可能性が示唆された。

予防行動意図に与える影響については、防護動機理論を用いた保健行動（喫煙、飲酒、薬物乱用）<sup>21)</sup>、エイズ予防行動<sup>22)</sup>の先行研究において、リスク認知を含む脅威評価と対処評価がともに高い場合において予防行動意図が最も高く、逆に両者がともに低い場合には予防行動意図が最も低くなることが報告されている。本研究の重回帰分析では、リスク認知の重大性の認知が、安全情報収集意図、感染症情報収集意図、海外保険加入意図に最も影響を与えていた。すなわち、被害の重大性が高いと認識している者ほど予防行動意図が高い傾向が認められた。

大学生を対象とした海外旅行における感染症の予防行動意図の阻害要因を調査した研究<sup>14)</sup>では、予防に対する自己効力感の高さと主観的知識が潜在的危険性を高めることが指摘されている。Rogers<sup>23)</sup>は、リスク認知と自己効力感が高い場合に、予防行動意図が高まるとしている。海外渡航においては、自己効力感だけでなくリスク認知も高める安全対策が重要である。

本研究では、日本人を対象とした海外渡航における犯罪、事故、感染症に対するリスク認知、自己効力感、主観的知識と予防行動意図の関連について検討したが、教育のような具体的対策の効果の検証は行っていない。今後、リスク認知を高める教育によって予防行動意図にどのように反映されているかの検討が必要である。また、2020年以降、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、国際的に海外渡航の制限が実施された。本調査は、2020年以前の調査であり、新型コロナウイルス感染症流行以降の海外渡航者のリスク認知と予防行動意図については検討されていない。本研究の結果に基づいて、今後、海外渡航者のリスク認知と予防行動意図を縦断的に調査していく必要がある。

## V 結 論

本研究は、海外渡航・滞在における日本人の犯罪、事故、感染症に対して、人々のリスク認知、自己効力感、主観的知識と予防行動意図との関連について明らかにすることであった。その結果、以下の結果が明らかになった。

- ①渡航回数別の比較では、犯罪では渡航回数5回以上の者は、渡航回数1回の者より重大性の認知が低かった。自己効力感、主観的知識は、すべてのハザードで渡航回数が多い者ほど高い傾向がみられた。
- ②被害経験による比較では、海外渡航における犯罪、事故、感染症の自分の被害経験は、リスク認知へ影響を与えていなかったが、身近な人の被害経験がある者は、ない者に比べてリスク認知が高かった。
- ③海外渡航に関してリスク認知の重大性の認知が高い場合に、予防行動意図が高い傾向が確認された。

## 謝辞

調査にご協力いただきました皆様に深謝いたします。本研究は、JSPS科研費 基盤研究（C）（一般）15K01648の助成を受けたものである。なお、本調査においては、利益相反に関する事項はない。

## 文 献

- 1) 法務省. 出入国管理統計. 2018 (<https://www.moj.go.jp/isa/content/001342681.pdf>) 2018.6.23.
- 2) 法務省. 平成23年における外国人入国者数及び日本人出国者数について. 2011 (<http://www.moj.go.jp/content/001234477.pdf>) 2018.6.23.
- 3) 外務省. 2015年（平成27年）海外邦人援護統計. 2015 ([https://www.anzen.mofa.go.jp/anzen\\_info/pdf/2015.pdf](https://www.anzen.mofa.go.jp/anzen_info/pdf/2015.pdf)) 2018.6.23.
- 4) 外務省. 海外安全ホームページ. (<https://www.anzen.mofa.go.jp>) 2018.6.23.
- 5) 厚生労働省検疫所. FORTH. (<https://www.forth.go.jp/index.html>) 2018.6.23.

- 6) 水嶋友昭, 林理. 原子炉開発専門家と一般人のリスク認知の差異. 実験社会心理学研究. 1995; 35(2): 178-84.
- 7) 奈良由美子. リスク認知とバイアス. 奈良由美子編. 生活リスクマネジメント. 東京: 放送大学教育振興会, 2014; 49-58.
- 8) 広瀬弘忠, Slovic P, 石塚智一. 大学生のリスク認知に関する日米比較研究. 社会心理学研究. 1994; 9(2): 114-22.
- 9) 楠見孝, 小林弘典. 海外旅行傷害保険の加入意図に及ぼすリスク認知の影響. 日本リスク研究学会誌. 1995; 7(1): 50-8.
- 10) Zimmermann R, Hattendorf J, Blum J, et al. Risk perception of travelers to tropical and subtropical countries visiting a swiss travel health center. Journal of Travel Medicine. 2013; 16(1708-8305): 338-43.
- 11) 社団法人日本旅行業協会. 海外旅行者の性別・年齢階層別構成比率 | JATA. 2015 (<https://www.jata-net.or.jp/data/stats/2015/06.html>) 2018.6.23.
- 12) Hartjes LB, Baumann LC, Henriques JB, et al. Travel health risk perceptions and prevention behaviors of US study abroad students. Journal of Travel Medicine. 2009; 16(1708-8305): 338-43.
- 13) 島田貴仁, 雨宮護, 菊池城治. 近隣での防犯対策が市民の犯罪の知覚に与える影響. 青色防犯パトロールと犯罪発生マップを例にして. 犯罪社会学研究. 2010; 35: 132-48.
- 14) De Man A, Simpson-Housley P. Factors in Perception of Earthquake Hazard. Perceptual and Motor Skills. 1987; 64(3): 815-20.
- 15) 海上智昭, 幸田重雄, 渡辺美香, 他. リスク認知に関する文化・環境心理学的研究の小総括. 安全工学. 2012; 51(3): 165-72.
- 16) 及川康, 片田敏. 河川洪水時の避難行動における洪水経験の影響構造に関する研究. 自然災害科学. 1999; 18(1): 103-16.
- 17) 木下富雄. リスク認知の構造とその国際比較. 安全工学. 2002; 41(6): 356-63.
- 18) 藤井聡. リスク認知とコミュニケーション. 大野隆造編. 地震と人間. シリーズ都市地震工学7. 東京: 朝倉書店, 2007; 54-95.
- 19) Millar MG, Millar KU. The Effects of Direct and Indirect Experience on Affective and Cognitive Responses and the Attitude-Behavior Relation. Journal of Experimental Social Psychology. 1996; 32(6): 561-79.
- 20) 笹竹英穂. 女子大生の犯罪情報への関心および防犯意識の形成についてーリスク認知および犯罪不安の観点からー. 犯罪心理学研究. 2008; 46(1): 15-29.
- 21) 渡邊正樹. 喫煙・飲酒・薬物乱用に関する高校生の脅威評価, 対処評価および予防行動意図: 防護動機理論に基づく分析から. 日本保健医療行動科学会年報. 2000; 15: 115-29.
- 22) 木村堅一. 防護動機理論に基づくエイズ予防行動意図の規定因の検討. 社会心理学研究. 1996; 12(2): 86-96.
- 23) Rogers RW. Cognitive and psychological processes in fear appeals and attitude change: A revised theory of protection motivation. Social psychophysiology: A sourcebook. 1983; 153-76.